

18世紀以前の医学における病理学

坂井 建雄

順天堂大学大学院 医学研究科

病理学 pathology は、病気の原因や発生機序を解明して病気の診断に役立てる。現在の病理学は2科に分かれ、病理解剖 anatomical pathology (人体解剖) では病気の診断のために遺体を解剖して組織や細胞の病変を調査し、実験病理学 experimental pathology では病気の原因・発生機序の解明のために、動物や細胞で病気を再現し研究する。18世紀以前の医学教育においては、医学理論 theoretica と医学実地 practica が主要な教科であった。病理学は医学理論における5つの部門の1つであり、フェルネルの『医学』(1554) が初出である。18世紀以前における病理学の内容と意味は現在とは大きく異なっている。19世紀に医学のあり方や疾患の概念が大きく変貌した際に、病理学のあり方も変化を遂げたと考えられる。

フェルネル Fernel, Jean の医学理論書『医学 Medicina』(1554) は、①生理学 physiologia, ②病理学 pathologia, ③治療学 therapeutices の3部門からなる。「生理学」7書はガレノスの生理学説を扱い、「病理学」7書は3つの要素、①疾患の総論、②疾患の各論、③徴候(尿、脈など)を含む。「病理学」には参考となる既存の医学著作があった。第1の『アルティセラ Articella』はサレルノ医学校で編まれた医学教材集で、ガレノス『医術』とヨハニティウス『入門』は生理学と疾患総論などを含む。第2の医学実地書は疾患の各論で、局所性(頭から足へ部位別)+全身性(熱病)の構成をもつ。第3のアヴィセンナ Avicenna『医学典範 Canon』は第1巻で①生理学、②疾患総論、③健康学、④治療学の医学的理論、第3-4巻で疾患の各論を扱う。

フックス Fuchs, Leonhart『医学教程』(1555) では、病理学で疾患の総論と各論が、徴候学で徴候が扱われる。ヘウルニウス Heurnius, Johannes『医学教程』(1592) は12書に分かれ、第6-8書で疾患の総論、第9-10書で徴候が扱われる。ゼンネルト Sennert, Daniel は浩瀚な医学理論書『医学教程5書 Institutionum medicinae libri V』(1611) と医学実地書として『熱病について4書 De febris libri IV』(1619) と『医学実地 Practicae medicinae』6書(1628-35) を著し、医学教育著作の集大成を行った。ブールハーフェ Boerhaave, Hermann は医学教育を大きく変革し、医学理論書の『医学教程 Institutiones medicae』(1708) では生理学を大幅に拡充し、病理学と徴候学を相対的に縮小した。古代以来の体液説を廃して、人体の機能を機械論的に説明した。弟子のハラーはブールハーフェの生理学を継承して生理学を医学理論から独立させ、医学理論書の形式は次第に廃れていった。ブールハーフェの医学実地書『箴言 Aphorismi』(1709) は、医学実地書の基本型(局所性+全身性)を廃して、疾患を症状・病態別に配列した。ソヴァージュ Sauvages, François Boissier は『方式的疾病分類学 Nosologia methodica』(1763) において症状・病態別の疾患分類を徹底させて、疾病分類学を創始した。

19世紀に入り医学理論書がほとんど書かれなくなった時期にシュプレングエル Sprengel, Kurt Polycarp Joachim は『医学教程 Institutiones medicae』6巻(1809-16) を著した。その第3巻の「一般病理学」は疾患の総論を扱い、第4巻の「特殊病理学」は疾患の各論を扱っている。19世紀において個別の疾患を扱う医学書は各国で表題が異なっており、ドイツ語では「特殊病理学 specielle pathologie」、フランス語では「内部病理学 pathologie interne」、英語では「医療/医学実地 practice of physic / medicine」がよく用いられている。